

顕現後第4主日礼拝

詩編139：1-9・ルカ10：2

5-38

(1)

あるアメリカの教会の講壇の側に、「サマリヤ人の説教は、もうたくさんだ」という落書きがなされていたといいます。真意の程は分かりません。わたし自身も、これまでこの箇所から何回も説教をしてきました。しかし、繰り返しお話しするたびに、少しずつ理解が深められてきたように思います。

この譬えは、ある律法学者が、「先生、何をしたら永遠のいのちを、自分のものとして、受けることができるでしょうか」(25)と、主イエスに尋ねたことから始まりました。

永遠のいのちへのあこがれは、昔から、多くの人がいだいてきた願いです。

しかし、尋ねてきた彼の動機が良くありません。「イエスをためそうとした」(25)とあります。

その不純な動機をいち早く見抜いた主イエスは、逆に彼に問い返しています。このように問い返すことは、主イエスがよくなさることで、

それでは、主イエスが、「律法には、何と書いてありますか。あなたはどこう読んでいますか」(26)と尋ねました。

すると、彼は、『心を瓜へく、思いを瓜し、知性を瓜して、あなたの神である主を愛せよ。』(申命記6：5)。また『自分と同じように、あなたの隣人を愛せよ。』(レビ記19：18)とあります。「一」と答えただけです。何とも優等生的な答えです。すると、主イエスは、やがて、「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、命を得ます」(28)と言われました。ところが主イエスのこころした対応に戸惑ったのか、彼はなおも自分の正しさを示そうとして、「では、わたしの隣人とはだれのことですか」(29)と尋ねました。その時、主イエスが語った譬えが、「親切なサマリヤ人の譬え」です。

主イエスは、「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物を剥ぎ取り、殴りつけ、半殺しにして逃げていった」(30)という譬えを語りはじめました。

「隣人とは誰のことですか」などと、抽象的に考えているうちは、何

とでもいえます。

しかし、一人の人間が強盗に襲われて半殺しになっている現場では、これはもう、考えている時間はありません。待ったなしです。そうした時、その人がどう振舞い、対処するかがテストされます。

「警え」ですが、この警の構成は実に巧みです。しかも、架空の話とはいえません。実際にありえた話です。エルサレムからエリコに下る道は、高低差が約800メートルあるようです。これは箱根と小田原と同じ高低差です。昼なお暗い、人通りの少ない場所ですから、強盗や追い剥ぎが出るには、格好の場所です。この人目のまったくない、隠れた場所で、「あなた」が、「わたし」が、どう振る舞うかが問われています。

いくら叫ぼうが、わめこうが、いかに悪ふざけをしようが、誰も見ていない、わたし一人が思いのまま振る舞える！、そうした、いわば密室のような場所において、人はありのままの自分の姿を現わし始めます。そこでは、見栄も外聞も気になりません！、しかし、まさに、そうしたところで、わたしの本当の姿・本心・本音が現われてきます。

知っているのはただ、わたしだけという場所において、わたしが何をするかを見ておられる、もう一つの目があります。

「私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかって海の果てに住んでも、(あなたはそこにおられます)」「詩編139:2、3、9」(と詩編で告白されているお方)、「隠れた所においてになる父」「隠れたことを見ておられるあなたの父」(マタイ6:6)が、そこで「あなた」を「わたし」をジッと見えています。これを忘れてはならないのです。悪いことをしても誰にもわからない、善きことをしても、誰にも認められない、そうした隠れた場所で、どう振る舞うかが問われています。

(2)

強盗に襲われた現場は、完全に人の目に隠れています。そうした場所ので、神に任せ、人々に御言を解き明かす立場の祭司・レビ人がどう振る舞うかが問われています。

先ず、祭司が通りかかりました。

「その道を下ってきたが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行きました。次はレビ人です。」その場所にきて、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った」「同じようでありながら、二人の間には微妙な違いがありました。

「祭司」は、チフツと彼を見るには見ました。しかし、強盗に襲われたと咄嗟(とっさ)に判断したようです。

それとも、「死体は不浄なものであり、祭司は触れてはならない」と言われているレビ記の御言が思い出されたのか、この男はすでに死んでいると判断して、彼に近づかなかったのかも知れません。しかし、実際は、彼は死んでいません。半死半生の状態です。そうと分かっているながら、祭司はその場を急ぎ立ち去りました。

「レビ人」も、その場所に来て、彼を見ました。「見た」とは、近寄って彼の様子を見届けたのです。近寄ればかすかに呻き(うめき)声も聞こえてきます、もしかしたら、彼と視線が合ったかもしれない。それで、恐れを感じたレビ人は急ぎその場を立ち去ったのです。

最後に現場にきたのは、「サマリヤ

人」です。「サマリヤ人」とは、ユダヤ人とサマリヤ人との間に生まれたハーフのユダヤ人(現在は、「ダブル」です)のことです。それで、サマリヤ人とユダヤ人とは普段のつき合いもなければ、会っても互いに挨拶もしませんでした。

そのサマリヤ人が、強盗に襲われたユダヤの男を見てかわいそうに思い、「近よって、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほつたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、わたしが帰りに払います』(33-35)。読めば読むほど、何とも言いようのないほじ、一つ一つは流れるような動作です。ためらいも、いちいち考えている節も見当たりません。ましてや、「してやっている」などという恩着せがましい風情は微塵も感じられません。しかも、彼のなした一つ一つは、「時」と「場所」と「目的」とがピタッと合っていることに驚きます。しかもです・・・、介抱したのが、日ごろから「ユダヤ人」が忌み嫌っていた「サマリヤ人」とい

えば驚きです。そのサマリヤ人が  
良き隣人となったといふのです。

(3)

三人とも、「その人を『見た』『こ  
とに、何ら変わりありません。』

しかし、サマリヤ人は、彼を見て  
見ぬ振りをせず、目を反らすこと  
もなく、しっかりと彼を見ました。彼  
が良き隣人となれたのは、ここに  
あります。先ず相手を「しっかりと見  
る」「しかも」目を反らさないで見  
た「こと」にあります。「たかが見る  
こと」で「……」と言っているのは  
ありません。これがなかなか難しい  
のです。「愛のなさは想像力の欠如  
にあると思います」と言ったのは、  
シモーヌ・バイユとこのフランスの  
女性です。

終戦直後、東京・上野の地下道に、  
ボロボロの衣服、髪ボウボウの状  
態で野宿している戦災孤児の彼ら  
を見て、自分はこうした孤児たち  
をひきとるべきではないかと示さ  
れ、福島で孤児院を開いた人がい  
ます。実に、それまでに多くの人が  
その地下道を通っていたので  
す……、にもかかわらず、「孤児  
を見た」「しかも」「しっかりと見た」  
のは、彼だけでした。そこからいっ  
さいのことは始まりません。

もう一つあります。サマリヤ人  
が強盗に襲われた彼を見て、「かわ  
いそうに思った」とあります。も  
ととは、「肝臓が痛む」という言葉  
の意味ですが、彼を見て、「哀れに  
思った」「心底同情した」「心底痛  
みを覚えた」といふのがこのサマ  
リヤ人でした。祭司もレビ人も、彼  
を見るには見ました。しかし、「肝  
臓が痛む」までにはならなかった  
ようです。もし、彼らと同行してい  
た者がいたとしたら、彼らの行動  
は、おそろしく、かなり違っていたと  
思います。

この祭司とレビ人と対称的なのが  
サマリヤ人です。身の危険な状況  
は同じでした。しかも、彼は、ロバ  
二頭を連れていきます。行商中なの  
です。何事も「仕事優先」「商売優  
先」とすべき時ですから、余計なこ  
とに係わっている時ではありませ  
ん。さっさと、そばを通り過ぎても  
おかしくありません。

ところで、助けてもらった男が後  
で気付いたことは、人間とは、つく  
づく、外見ではない、社会的レッテ  
ルでもないということです。「人は  
うわべを見るが、主は心を見る」

(①サムエル16：7)

主イエスは、最後に、「三人の中で

だれが、強盗に襲われた者の隣り人（となりびと）になったとおもいますか」と尋ねました。すると律法の専門家は、「その人にあわれみをかけてやった人です」と答えた時、主イエスは、「その通りです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」と言われました。

しかし、実行しなさい、と言われて、サマリヤ人のような隣人愛を実践出来るものでしょうか。

「トルストイ」が、若い頃、「山上の説教」を読んで、すっかり感動し、全人類の足元に跪いて（ひざまずいて）キスをしたというほどの愛を抱いたといえます。ところが、その夜、隣の家の赤ん坊が一晩中泣き止まないのに腹を立てた彼は、その赤子を絞め殺したい、という衝動に駆られたといえます。どうも自分の身近にいるものほど愛せないようです。

これは、見方を変えて読み直す必要があるようです。即ち、強盗に襲われた人の立場に自分を置き、読み直すと様子が変わります。

主イエスは、ある時、「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、

裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたではないか。はっきり言っておく。わたしの兄弟姉妹であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」と言われてました。

倒れ伏し、悶え苦しんでいるわたしに目をとめてくれた人は一人もいません。多くの人が、見て見ぬ振りをして、自分のそばを通り過ぎて行きます。人々から教師と尊敬されている人まで、見て見ぬふりをして通り過ぎて行きます。しかし、そうしたとき、「わたしの兄弟姉妹であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と主イエスは言われましたが、わたしに近寄り、介抱し、助けてくれた「サマリヤ人」とは、「イエス・キリスト」ではないでしょうか。

「よきサマリヤ人の譬え」から、隣人とは何かを教えられます。けれども、肝心なことは、主イエスが、真の、良き、隣り人となってわたしを助け、介抱してくださったお方であるということではないでしょうか。

わたしたちが善き隣り人となるこ

と、勿論大切なことです。けれども、それより、この傷つき、うめいているわたしに、最も善き隣人になってくださったのは、他の誰でもありません。イエス・キリストです。この主イエスの内に、真の愛を見い出さないうちは、偽りのない、真の隣人愛に生きることなどあり得ないのです。

それは、こうした主イエスの愛に触れなければ、人が見ている時にしか、ありえない愛ではないでしょうか。大切なことは、わたしたちに対して、本当の隣り人となってくださったお方ー、イエス・キリストに気づかねばなりません。

【祈ります】

天のお父さま、隣人を愛することを学びました。しかし、いかに、願い努力をしても、真の隣人愛に生きることができません。主イエスの愛を知り、はじめて、真の隣人愛に生きるすべを学びました。あわれみの主を知ったわたしたちです、わたしたちもあわれみに生きるものとなさしめてください。主イエス・キリストの名により祈ります。